

胎児への影響

器官や組織が作られる胎生期には細胞分裂が盛んなので、胎児が放射線の影響を受ける可能性は高くなります。

受精後2週から8週までの時期は、器官形成期と呼ばれ、身体の臓器や組織の基ができる時期です。この間に大量の被ばくをすると、**奇形**が発生します。被ばくによる奇形としてこれまでに知られているのは**小頭症**で、0.1グレイ以上の被ばくで発生すると考えられています。

受精後8週から15週の胎児は脳がつくられる時期です。この時期に被ばくすると精神発達が遅れる可能性があります。胎児が0.12～0.2グレイ以上*¹の被ばくをすると起こるといわれています。また、8週から25週の期間に被ばくすると、多く被ばくすればするほど知能指数（IQ）が低下することが知られています。1グレイ被ばくした場合には、約4割がIQが67以下の重度の**精神発達遅滞**を起こします。

このように、胎児が一度に100ミリグレイ以上の放射線を受けた場合には胎児に何らかの症状が現れる可能性があります。そのため、妊娠中は不用意に医療被ばくなどしないように注意が必要です。しかし、100ミリグレイに達しないような放射線量では生まれてくる赤ちゃんに奇形や知恵遅れなどの症状が見られることはありません。

*1 広島・長崎の被ばく者のデータから示唆されるしきい線量。